経・論にみる人間観　Ⅰ

〈阿含経・相応部教典関係〉

稲　津　　稔

1．まえがき

この研究は、仏教の経、論のなかで「人間というものがどのように観られてきたか」について知り、そこに共通して流れる仏教の人間観を求める第一段階の研究である。そのため、最初に釈尊の言葉を多く含むといわれる漢訳経典『阿含経』および、パーリ仏典『Samyutta Nikāya』(邦訳は『南伝大蔵経』の相應部経典)、そのほか釈尊の言葉を伝えるとされる経・論について調べることとした。しかし、いずれも長期にわたる口伝によるもので、矛盾した点も多い。この点はあとがきに述べるような考え方で対処した。

2．人間観の定義

多くの経典、あるいは論に含まれる人間観について論ずるためには、何をもって人間観と言うかを明らかにしておく必要がある。したがって、各々の教えの中で説かれている人間観の特徴を「人間に関する特定の設問に対して、その教えの立場でどの様に答えるか」ということで表現し、これをこの論文における「人間観」の定義とする。その場合、その設問はできるだけ単純で、特定の経・論あるいは、特定の教えの主張を強調するものであってはならない。　このような観点に立って、今回は設問を次のⅠ、Ⅱのように設定した。

Ⅰ．人間は如何にあるか（人間観Ⅰ）

人間と人間をとり巻く環境をどのように見ているか。(認識論と存在論)

(1)人間とその環境をどのように認識するか。(認識論)

(2)現実に我々人間が体験するあらゆる現象は何物であるか、またその背後に何物があるのか（存在論）

Ⅱ．人間 如何にあるべきか（人間観Ⅱ）

(1)人間 如何にすべきか。(実践論・修行論)

(2)人間の究極にあるべき状態はどんなものか（修行論）

以下、4節、5節において、『阿含経』および『相応部経典』にみる人間観を人間観Ⅰ（認識論、存在論）と人間観Ⅱ（実践論、修行論）に分けて示す。

3．人間観の基底にあった考え

3．1．人間観と四法印

「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」の言葉は釈尊の語られた言葉として『阿含経』およびパーリ仏典の『相応部』（Samyutta Nikāya）の中に見られる。[註1)] [註2)] [註3)] これらに「涅槃寂静」を加えたものは後世、仏教の基本思想とされる「四法印」である。これを先にあげた人間観の存在論と実践論の立場から眺めてみると、「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」は存在論、「涅槃寂静」は実践、修行により到達する理想的境地ということができる。「四法印」はまさに仏教の人間観を表している。

3．2．釈尊の現実に対する態度

釈尊の説かれた教えを「苦」からの解放の教えと見れば、その教えの要旨は「四諦、八正道」と要約することができよう[註3)] [註4)]。人生は苦であるとし、苦・集・滅・道と説き進む明解さは、「苦には原因（集）があり、その原因を取り除いた境地（滅）に至るための方法（道）がある」と説く論理性にある。現代人にも、たやすく受け入れられる合理的な説得である。そして、その苦の原因（集）とは誰もがもつ煩悩であり、それはさらに無明からおこるとして、十二因縁を説かれたのである。この中には、人間と人間をとり巻く環境の内外に、創造神などの絶対者の存在を認めない、当時としては英断ともいえる洞察が前提となっており、「すべてが縁起すること」のみを認めている。神への救済にすがろうとする姿勢は影を潜めている。[註2)]

現代のような科学知識のない当時ならば、太陽、月の動き、星の運行、虹、日月蝕、雷、などの自然現象、あるいは大衆を苦しめる地震、火山の噴火、洪水、飢饉、疫病などの災害に対して、その背後に擬人化した強烈な力を考え勝ちであった筈である。人間の生存を脅かした天変地異の原因を、神の、あるいは魔神のしわざと考え勝ちの時代にあって、この英断がなされたことには、想像を絶する英邁さを感ずる。当時において、形而上学的な判断を一切拒否した態度はむしろ驚嘆に値するといえよう。

人々の体験する現象に対するこのような態度は、釈尊のどのような基本的考えから来るのであろうか？　これについて、増谷文雄氏は釈尊の基本的姿勢を

「次の3点について確信を持つこと」から来るものと断定される。[註5)] [註6)]

①．現証的（sandiṭṭhiko）＝じっとその真相を観察すれば、現にその真実なる事がわかる

②．即時的（akãliko）＝時を隔てないで、その真実なることがあらわになる

③．来見的（ehipassiko）＝何人にも開示されるもの、来って見よ！

これらのことは、『相応部経典』35－70、Upavãna、優波婆那の項で語られていることで明かである。[註7)]

4．人間観Ⅰ－①認識論

4―1．人間存在（五蘊）

釈尊が正覚された内容の基本は「縁起の法則」であり、その結果、すべては「無常であり」したがって、「苦であり」、「無我である」と悟られた、と語り継がれている。[註1)] [註2)] 釈尊は、すべてのものは縁起の法則に従っており、「本質的には実体を持たないもの」であると結論されたのである。[註7)] とすれば、人間存在をどのように捉え表現するか、これは極めて大きな課題であろう。当然、人間も一切のものごとと同様に、縁起の法則に従うものである。したがって、依って起こる現象の一つとしてしか捉えられない人間を、どのように表現するかは、最も大きな課題であった。その難問に対する答えが、人間の要素を五つに分析して表現する五蘊という概念（表1）の導入であった。

表1　五　蘊 [註8)、註9)、註10)、]

	五蘊	サンスクリット パーリ	English	内　容	
1	色	Rūpa Rūpa	Material quality	物質的要素；人間の肉体	肉体的 要　素
2	受	Vedanā Vedanā	Feeling Sensation	感覚、感受作用	精神的 要　素
3	想	Samjňā Saňňā	Perception	表象作用	〃〃
4	行	Samskāra Saṅkhāra	Preparation *1	意志もしくは意思	〃〃
5	識	Vijňāna Viňňāṇa	Consciousness *2	認識作用。 対象の認識を基に、判断を通して得られる主観。心作用全般を総括する心の動き。	〃〃

*1 ; A purposive state of mind　*2 ; A mental quality as a constitution of individuality

この考え方では、個人存在は、物質面（色）と4つの精神面（受・想・行・識）とからなり、この5つの集まり（＝蘊＝khandha）以外に「我」という独立したものは考えられない、ということになる。すなわち、人間を「肉体と4つの心理現象」の集まりとして捉え、人間の存在は「5つの構成要素の集まり」であるとしている。[註1] それを在らしめているものは、「縁起の法則」以外の何物でもない。そこには形而上学的な霊魂、さらには創造神も仮定していない。ここにも、前述の釈尊の、現世的・即時的・来見的な合理的姿勢が覗える。

4－2．認識作用（六根・六境・六識）

釈尊はこのような人間観を基に、人間の肉体器官（色）と心理機能（受・想・行・識）が外界に対してどのように反応して行くかを、表2に示す六根・六境・六識の関係で説明されている。これは、仏教初期の認識論である。

この認識論においては、まず、心の中に起った心理的事象を知覚するはたらきをするものを「意」とした。そして、この「意」を5つの肉体的感覚器官「眼・耳・鼻・舌・身」と同等に取り上げ、これらを合わせて、外界からの刺激を受け入れるはたらきをする6つの感覚器官、六根としている。そして、この六根を通して人間が感受する外界を六境に分ける。すなわち、肉体的感覚器官に対する外界としては、色（色と形、視覚の対象）・声（音、聴覚の対象）・香（臭覚の対象）・味（味覚の対象）・触（触覚の対象）の5つを対象とし、心理的機能を持った知覚器官「意」に対しては「法」をその対象（「意」に対する境）とすることによって、合計六つの対象、六境を立てている。

これら六境、六根、六識の関連についてまとめてみれば、次のとおりである。すなわち、上記のそれぞれの根が、その対象である境から刺激を受けて感受するときに、そのつど、ある条件設定の下に感受すると考えられる。その条件設定のために働く心を、六識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）としている。これら六つの識が根（感覚器官・知覚器官）を通して外界（境）をとらえる。すなわち、認識作用は根・境・識の和合によって成立するとしている。六識は視・聴・嗅・味・触覚の器官および思考力を媒介とする認識作用に条件付けをする六種の機能であると考える。

表2　六根・六境・六識 註7)、註9)、註10)、

六根 能力・能力を有する器官			六境 認識の対象・対象領域		六識 分別、判断の認識作用・それを行う認識主体（心）	
眼	視覚能力 視覚器官	感覚 能力	色	色・形あるものとして眼による認識の対象	眼識	目を通して見る心
耳	聴覚能力 聴覚器官	〃 〃	声	言語・音など聴覚の認識の対象となるもの	耳識	耳を通して聞く心
鼻	臭覚能力 臭覚器官	〃 〃	香	香．臭みなど臭覚の認識の対象となるもの	鼻識	鼻を通して嗅ぐ心
舌	味覚能力 味覚器官	〃 〃	味	五つの味など味覚の認識の対象となるもの	舌識	舌を通して味わう心
身	触覚能力 触覚器官	〃 〃	触	堅・暖・動・重・軽…など触覚の認識の対象	身識	全身の触覚器官を通して触る心
意	知覚能力 知覚器官※1)	知覚 能力	法	上記五境以外の一切物、思いの対象　※2)	意識	知覚器官を通して知り思う心

※1）意根；意としての機能　知覚能力　　※2）心で思われるもの。思いの内容。

4―3　五蘊と認識作用

(1) 認識の流れ図

この人間の構成要素である五蘊と認識作用との関係を図1のように図式的にまとめて見た。

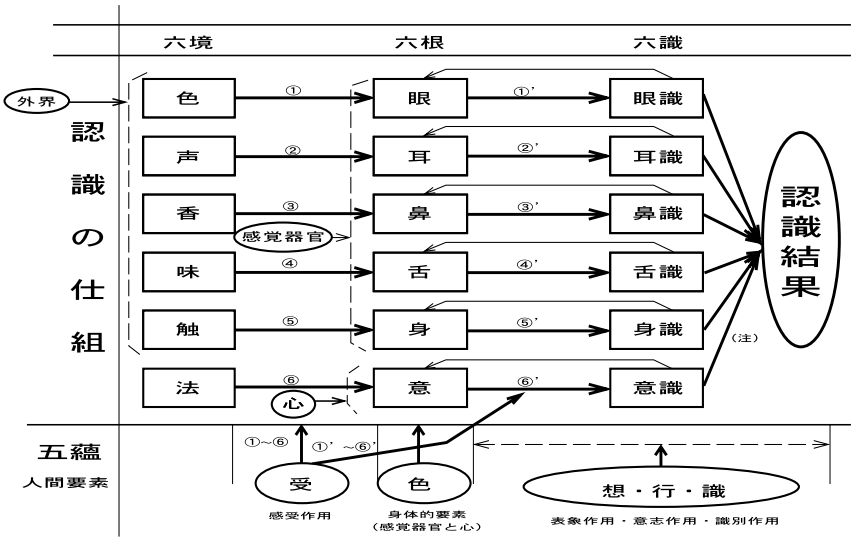
ここでは、まず五蘊の「色」*註は六根のことである。六根のうち眼・耳・鼻・舌・身の五根は肉体に付属する感覚器官である。そして第六番目は意根である。この意根は、五根のように肉体の外に現われている物理的な感覚器官ではないにもかかわらず、六境のうち第6番目の法境に対して反応する器官として想定したもの（心）で、当時は五根と同等の「色」として考えられたと思う。このように、意根をふくめた六根は、いずれも人間の体に付随した反応器官群であるとして、これをまとめて「色」としているのである。

推測ではあるが、意（心）が眼・耳・鼻・舌・身のような物理的な器官と同等な器官として取り上げられた背景には、心臓を心の宿る一つの反応器官と考えたたことに由来するのではないかと思う。一方、『倶舎論』では「心法」を設けて「色法」から意根、法境を除いている。これは、『倶舎論』の実在に対する考えに基づくもので、外界である色・声・香・味・触の五境と人体に備わ

る眼・耳・鼻・舌・身の五根をいずれも物理的な実在とみなし「色法」としたものである。[註11] したがって、『倶舎論』の「色法」は『阿含経』で人間要素として考えられた五蘊の中の「法」とはかなり意味合いが違うと考える。このような観点から、『阿含経』の段階では以上のような、心臓に思いを寄せる考えから意根を「色」に含めていたと推定する。

*註 この「色」は六境の「色」より狭い意味で、人間の体の中の物だけに限定したものである。

図1　認識の流れ



そして次に、六根の認識対象として、それぞれ色・声・香・味・触・法の六境が挙げられる。6番目の法は、心の対象、すなわち、五根により感受されたものおよび、表象、思想など思いによって作られ、心の認識対象になるものである。六根と六境の間は、まず五蘊のうちの「受」の感受作用（図の矢印；①、②、③、④、⑤、⑥）によって結ばれ、初期的な感受が行われる。

次に、その感受に対して、五蘊の「識」である六識のはたらきと、五蘊の「想」、「行」のはたらき（図の矢印；①'、②'、③'、④'、⑤'、⑥'）とが関わって認識が完結する。「受」を認識に到るまでの感受作用とすれば、①～⑥と①'

～⑥ ’の両者を含めた機能が「受」である。

以上のようにして、人間を物理的な器官「色」（眼・耳・鼻・舌・身）と心理的な機能「受」・「想」・「行」・「識」とを合わせたものとして捕らえたのが五蘊の考えである。この意味から五蘊を人間的要素と呼んでいる。

この図のように五蘊の上に六根、六境、六識を並べてみると、これらの関係がいかにも整然とした図式になり、人間の認識の構図がきわめて整理された形に見えてくる。しかし、このように単純に整理してみると、次のような疑問点があらわになる。すなわち、

①六根の中、最初の五根である身体的要素（器官）、眼・耳・鼻・舌・身と最後の根である「感覚器官ではない意（心）」とを同等に扱ってよいのか。

②同じく六境のうち、「純粋な感覚対象である色・声・香・味・触」と「思いの対象である法」とは異質ではないか。

③五つの感覚器官で感受され認識された結果が思いの対象になるとすれば、上記の「法」の中には、感覚器官による認識結果が入るような図にならなければならないのではないか。

④思いの対象になる「法」の中には、自らの思考作用で作られた印象、記憶、概念、思想などあらゆる思いがあると考えなくてはならないのではないか。法は極めて複雑深遠なものとして扱わなくてはならないのではないか。

以上のようなことを考慮に入れて、『阿含経』の説く認識機能の意味を私なりに描いてみたのが図2である。ここでは法境→意根→意識の関係は、他の色境→眼根→眼識などの5種の根→境→識の関係とは異質として扱っている。これが本来の、五蘊と六境・六根・六識の関係であると考える。

図2で、外界からの刺激を受けて認識が成立するまでの経過を順を追って示してみる。

1) まず、純粋な外界である五境（色・声・香・味・触）から五感すなわち五根（眼・耳・鼻・舌・身）への第一次感受作用は、矢印①、②、③、④、⑤で示される。これは五蘊の「受」の機能によるものである。

2) つぎに、五根（眼・耳・鼻・舌・身）により感受されるに際し、五識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識）の判断機能が作用して、識別結果となり、それが①’、②’、③’、④’、⑤’（二次感受作用）の矢印に沿って意

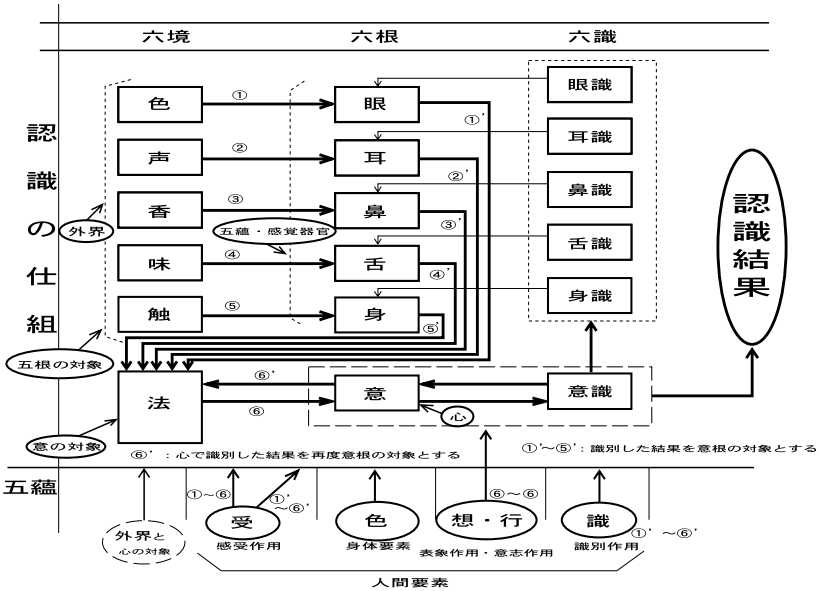
（心）の対象である法の中へと送り込まれる。

3) この「法」の内容は他の五境の場合と同じように根の感受対象となる。この場合は意根の対象となり、法境と意根は、五境と五根の場合と同様に「受」の機能、矢印⑥で相い対する。

4) 一方、「法」から感受した内容に対して意根は意識の機能に従って判断・識別・整理を行って、新たな思いを創造し、その結果を再び「法」の中へと送り込む（矢印⑥）。さらに、「意」と「法」との間では矢印⑥、矢印⑥'を通じて内容の整理が行われる。そして、その結果は意識へも影響を及ぼす。（意根と意識の間の往復矢印の意味）

5) 意識の関与により⑥と⑥'による相互作用が繰り返されることによって、法の中には、五根による識別結果だけでなく、「想」、「行」、「識」による「表象、意志、その他の心理的産物」が蓄積される。これらを総合した結果を意根が感受して、さらに意識が関与して認識結果が出てくる。そして、それが人間の身口意の行動となって現れる。

図2　人間の認識の流れ



以上から意根、法境は他の五根、五境とは異なった特殊なものと考えざるを得ないが、意根、法境は五根による感受結果を受容してはじめてその機能を発揮できるものと考えられる。このように考えると、釈尊が人間要素として考えられた五蘊（色・受・想・行・識）は、人間の限定された5つの感覚器官（五根）と、それから入力される情報の処理機能であって、それ以外の何ものでもないということになる。そうとすれば、人間の「ありよう」は眼・耳・鼻・舌・身の5つの感覚器官の入力のみによって成立しているということになる。

しかし、人間はその後、科学の進歩によって、宇宙に存在する情報伝播媒体、たとえば電磁波（赤外、紫外線を含む）、素粒子、超音波……などなどを視覚情報、あるいは音の情報に換えて感知することに成功した。それらが感知できるようになり、認識対象の範囲は量的には広がったといえよう。しかし、それ以外に科学を駆使しても人間の決して感知できない無数の情報伝播媒体が法界に遍満しているかもしれない。それには一神教徒の言う神の声があるかもしれない。しかし、釈尊はその可能性を否定も肯定もしないで、人間として出来うることは、この五根の感覚だけを入力として、冷静に考え、修行するより他に人間としての生き方は無いとしたのである。そして、その中で必ず悟り（涅槃の境地）に到達できると説かれたのである〔あきらめ（失望）から諦め（Erleuchten、enlightening）への転換〕。その方法は「法」の中に蓄えられるあまたの心理的産物を「意識」・「意根」によって適切に処理することである。修行・実践とはその手法を勝ち取ることではなかろうか。

(2) 認識の構図と類似するもの

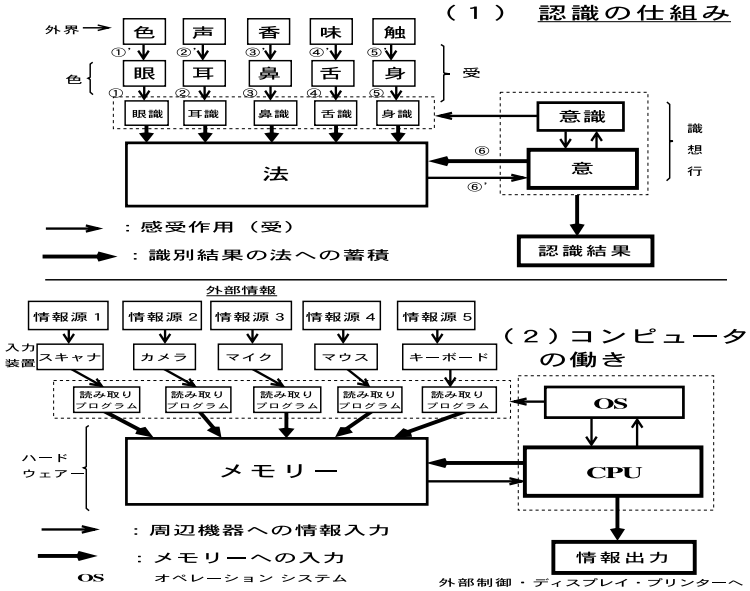
これまで述べてきた認識の流れを図3の（1）「認識の仕組み」のように、並び替えてみると、同図の（2）「コンピュータの働き」の図式とあまりにも酷似していることに驚きを感じる。

図の（1）では、色・声・香・味・触の五境（情報源）が眼・耳・鼻・舌・身の五根を通して五識の機能の助けによって感受され、「法」にそれらの情報が入力される。これと同じように、図の（2）に於いては、外部情報がキーボード・マウス・マイク・カメラ・スキャナーなどの入力用外部機器を通してコンピュータのメモリに入力される。その際、これらの外部機器からの情報の入力を助けるのが各機器専用の「読み取りプログラム」である（五識の機能に似ている）。

このように、五蘊は情報処理系であるコンピュータシステムと類似している

点が多い。一方、人間の脳神経系統についても、これと同じように酷似していると思われる。しかし、脳神経の場合は、六根、六識に相当するはたらきは、さらに巧妙に組織化されていると考えられる。大脳生理学は最近急速に進歩してきてはいるが、いまだ未知の分野が多い。しかし将来、特に、法境・意根・六識のはたらきの解釈について何らかの示唆が得られるのではないかと期待する。

図3　認識の仕組みとコンピュータ処理

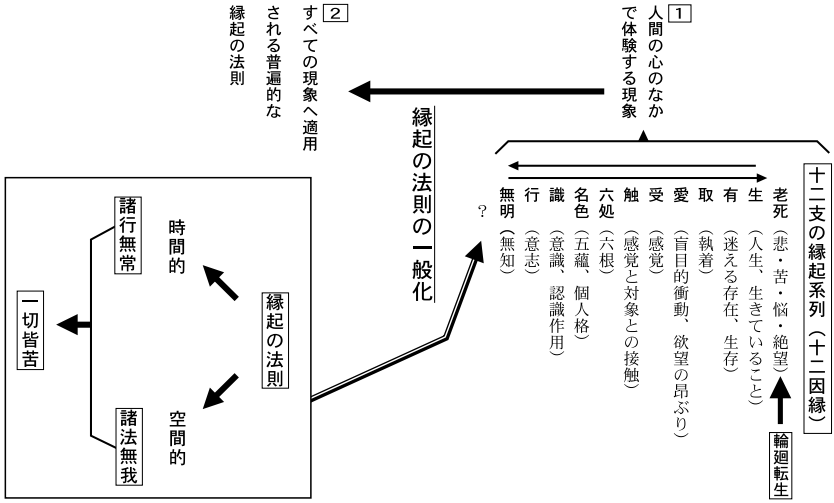


(3) 五蘊と無我

上に挙げた図式は、縁起によって生じた五蘊が、それぞれどのような法則によって関わりあうかを図によって示してみたものであって、五蘊を実在と見ているのではない。そして、『阿含経』、『相応部経典』による限り、釈尊は「五蘊（色・受・想・行・識）もすべて無常であり、無我であり、無我であるから人間の構成要素とした五蘊すらも、わがものにあらず、わが本体にあらず。このように見ることが正しい智慧である」と言い切られている。そしてさらに続けて、「このように正しい智慧をもって如実に見るがよい、そのように正しき

智慧をもってみれば、その心は執することなく、煩悩を離れて解脱するであろう」と言われている。[註11) 註12)]

図4　十二因縁と普遍的な縁起の法則



5．人間観Ⅰ－②存在論

「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」が『阿含経』、『相応部経典』に観られる存在論であるとすれば、それはどこから来たのであろうか。ここで一つの仮説を立ててみよう。

それは十二支の縁起（十二因縁）から始まる。釈尊当時の大衆はインド古来の輪廻転生の苦にさいなまれていたと考えられる。それは老死への恐怖となり、大衆は老死からの解放を願っていた。釈尊が悟られたときに、最初に示された十二支の縁起系列は、その老死の原因を釈尊が追究された結果であるとされている。これは、図4の無明から老死にいたる系列に見られるように、無明があるために最終的に老死苦にいたるという明解な縁起の論理（これあるによりてこれありとする因果の論理）である。しかし、この段階では、「縁起の法」は十二支縁起のなかに限られた法則である。一方、この「縁起の法則」がこの世のすべての現象に適用される普遍的な法則であると気づかれたとき、そこで、

改めて存在をみる眼が拓かれた。すなわち、縁起の法則は時間的には「諸行無常」を、空間的には「諸法無我」を、そしてその結果として「一切皆苦」を導き出すことになる。この「諸行無常」、「諸法無我」、「一切皆苦」を『阿含経』、『相応部経典』の存在認識とみる。

そして十二支の最初の「無明」（無知）はこの事実を知らないことであったのである。とすれば、この「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」を如何にして悟り、その結果、無明を克服して、老死を超越した涅槃の境地に到るか、を教えるものが次の実践論、修行論である。

6．人間観Ⅱ－実践論、修行論

6．1　涅槃に到る道

釈尊は「すべては縁起するものであり、したがって無常であり無我である」と説かれた。そしてさらに「五蘊もまた無我であり、無我であるから自分（人間）の要素である五蘊も「わがもの」ではない、また、「わが本体」ではない。このように見ることが正しい智慧である」と言い切られた。そして「この正しい智慧を以ってすべてを如実に見れば、心はあらゆる執着を離れ、苦を離れて涅槃に到る」と教えられた。五蘊を我が物として、重荷のごとく負うものに対して、「その重荷を捨てよ、そのためには渇愛を根絶せよ、そうすれば無欲になって涅槃に到るであろう」と諭された。[註13）註14）註15）]

6．2　実践（修行）八正道

究極にあるべき状態、涅槃に到達するためには、無常・無我を悟り、煩悩の渇愛を除かなければならない。釈尊はその涅槃に到るための唯一の方法は八正道（正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）であると説かれた。[註3）註4）]

何故に八正道を修行することによって、「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」を実感し、無明が除かれるのであろうか。再び人間の認識の流れを示した図2に戻って考えてみる。まず、この図の中の、右下の「意識」に八正道を修行していこうという意志が芽生えたとすると、図の⑥と⑥ ’2つの矢印で示される「法」と「意」との対応がその「意識」に従って変化する。その結果、受（感受作用）・想（表象作用）・行（意志作用）により創られて「法」（意（心）の対象）のなかに蓄積されていたいろいろな思いが浄化されていく。そして「法」の中には「意」が苦と感ずるものが消失する。これが修行による涅槃への到達

の図式ではないだろうか。たゞ一つ問題は、どうして浄化作用が生まれるのかということである。ここに「法」と「意」の中に隠された人間の、そして脳機能の神秘性があるという仮説をおいておくことにする。

7．まとめ

『阿含経』、『相応部経典』当時の仏教人間観としての特徴は、

①人間は五蘊といわれる単なる要素として捉えられ、その五蘊は人間の限定された5つの感覚器官（五根）と、それから入力される情報の処理機能である。（認識論）

②縁起の法則を基盤として、この世の存在すべては、時間的には「諸行無常」、空間的には「諸法無我」、そしてその結果として「一切皆苦」であるとした。（存在論）

③涅槃の境地に到るには、八正道を修行して「諸行無常、諸法無我、一切皆苦」を実感することである。（実践論、修行論）

8．あとがき

『阿含経』、『相応部経典」は長期にわたる口伝の期間を経て編纂されたものであるため、記述されている言葉の中に矛盾する点も多い。したがって、釈尊が語られた言葉についても、それらから釈尊の真意を推定することはきわめて重要なことである。しかしその推定に正確を期するとすれば膨大、かつ、難解な資料に挑戦することとなりそれ自体が大きな研究に終わることとなる。そこで、『阿含経』や『相応部経典』から釈尊の人間観を知るに当たって、それらの中から、できるだけ広い範囲で互いに矛盾しない部分のみをとって、釈尊の考えとし、『阿含経』、『相応部経典』を通じて見受けられる釈尊の人間観を探ってみた。独断偏見があればご教示いただきたい。

また、元来ことばによって表現されてきたことを、図に描いて顕わにしたことによって、今後検討すべき重点も浮き彫りにできた。今後、諸賢のご指導を得て、研鑽を深めて行きたい。そして、後世の仏教の人間観をみる上での基礎にしたいと思う次第である。

註

(1)『国譯 ―切経印度撰述部　阿含部―』1935. 7月　大東出版　巻の第一．第一品(p.1)、第二品（p.4）

(2)『南傳大蔵経　相応部経典三』、1940. 2（大正新脩大蔵経刊行会）　犍度篇　二二蘊相応、第一　根本五十経、第1　那拘羅父品、(5）三昧（p.20)、第2無常品(p.32)、　　第二　中五十経、第2阿羅漢品（p.115）

(3)『ダンマパダ』（法句経）273偈～289偈（『真理のことば・感興のことば』中村元訳　岩波文庫33－302－Ⅰ　1978. 1）

(4) 増谷文雄　『阿含経典』第一巻 ―人間の分析（五蘊）に関する経典群―　筑摩書房　1979. 3　因縁相応、20縁（p.152）

(5) 増谷文雄　『存在の法則（縁起）に関する経典』―「阿含経を読む3」―、昭和60年6月、角川書店、(p.33）

(6)『南傳大蔵経　相応部経典四』 1940. 2（大正新脩大蔵経刊行会）六處篇、三五、第一　六處相応、(70）優波婆那（p.66）

(7)『国譯 ―切経印度撰述部　阿含部―』　1935. 7　大東出版　巻の第二．第七品、(p.48）

(8) 中村元他　『岩波仏教辞典』 1989. 12　岩波書店（p.261、p.355）

(9) 増谷文雄　『阿含経典』第2巻 ―人間の分析（五蘊）に関する経典群―　1979. 5 筑摩書房（p.4, p.9, p.66, p.102）

(10) 中村元他　『仏教語大辞典』 1981.5月　東京書籍（p.355）

(11) 増谷文雄　『阿含経典』第2巻 ―人間の分析（五蘊）に関する経典群―　1979. 5月　筑摩書房　蘊相応（p.9～）

(12) 南傳大蔵経　相応部経典三』、1940. 2（大正新脩大蔵経刊行会）犍度篇　二二蘊相応　第一　根本五十経、第1那拘羅父品、(5）三昧（p.20）

(13) 増谷文雄　『阿含経典』第2巻 ―人間の分析（五蘊）に関する経典群―　1979. 5 筑摩書房「汝らのものにあらず」(p.58）

(14)『南傳大蔵経　相応部経典三』 1940. 2（大正新脩大蔵経刊行会）犍度篇　二二蘊相応　第四　非汝所應法品（p.53）

(15)『大正大蔵経　第二巻』 雑阿含経（p.7　段23行目～）